

# 中東レポート

## シオニストの陰謀を許すな

一九九三年二月一〇日

二月一日のBBC放送が、「就任二週間足らずにして、このような措置。クリントン政権への非難の声が……」と伝えたのは、クリントン新政権の欧州に対する貿易姿勢に関するEC外相会議での怒りの声であったが、中東でもまたたく同様な声が沸き起つている。

一月二十五日、ガーリ事務総長は安保理に、安保理決議七九九に対する拒否の姿勢は「イスラエルによる度重なる違反行為の最新のものでしかなく」、国連なれば「安保理の権威に対する挑戦」であり、イスラエルに安保理決議を遵守させ「その全会一致の決定を尊重することを

確保するのに必要などのような措置」をもととする。および被占領地におけるイスラエル人の権侵害に対しては「人権モニター部隊」を設置するよう勧告し、さらには「もし私が（こうしたこと）安保理に勧告しなかつたなら、私の義務を怠ることになる」と付け加えた。

だが、イスラエル側は、ガーリ事務総長の対応を「一方的で背景を完全に無視したもの」（二五日、同国国連大使）とする一方で、まず同国最高裁決定まで安保理討議を引き延ばすよう策動。米国がイスラエルへの制裁を許さないとし

理の後、二八日に追放決定を合法と判定した。同時に米国の意を受けた安保理議長国の日本は、それでも討議を開始しようとせず、任期切れをもって責任回避。ラビン政権は、三一日にアラブ系米人を逮捕し、ハマスは国際的なテロ組織であると打ち上げて追放の正当化を試みたうえで、二月一日、約一〇〇名の帰還を認め、他の追放期限も半分に減らすと発表した。米はそれをもって、もう安保理で討議する必要はないとした。

アラブ内では、クリントン政権の公正な対応に期待する声があった。だが、こうした措置の後、クリントン自身は、選挙戦の最中に「自分はシオニストである」と言明した、そして今、シオニストの本家＝イスラエルの首相の言いなりになる姿をさらけ出した、新世界秩序の指揮権はクリントンではなく、ラビンにある」といった揶揄の声とともに、米＝イスラエルの策動、すなわち、シオニストの陰謀に対する非難の声が沸き起つている。

### 第87号

発行 ウニタ書舗  
東京都千代田区神田神保町1-52  
TEL.(03)3291-5533  
編集 J.R.A.  
郵便振替 東京1-4843  
三菱銀行神保町支店 当座9012656  
会員制 年会費24000円

日次  
シオニストの陰謀を許すな .....  
資料 .....  
・追放非難の諸声明 .....  
・パレスチナ指導者会議の結果を批判する（抄）  
・特別レポート——被追放者の現状  
・ガザの子供たちは銃弾を恐れない（抄）  
・誰のための国連の改革か（抄）  
重要日誌（一九九三年一月一一日）  
（二月一〇日） .....  
編集後記 .....  
16 15

5  
1

できない」とラビン政権がクギをさしていたのだから、そうなることは目に見えていたが、結論は合法という判決。これはユダヤ国家の「破滅への道」(ツェメル弁護士)、「最高裁が、(政府の)バカげた決定を再考するよう求めなかつたのは残念」(ヘブライ大学学長)とユダヤ人内からも非難と失望が続出。イスラエルのアラブ人社会からは、「決定は人種差別、もし彼らの追放が合法だというなら、テロ行為を展開している極右ユダヤ人をこそ追放すべきだ」という非難の声が巻き起つた。

統一ラビン政権は、アラブ系米人を逮捕し、彼らをハマスの組織者であり、米国にある本部から組織再建の指令書を持つていたと喧伝する一方、米にハマスとイスラミック・ジャーハードの事務所すべてを閉鎖するよう勧告した。このラビンからの「指揮」に対して米側は、ハマスが本部を持つてはいけないとし、四月のテロ年次報告でハマスをテロ組織と見なすと発表して、追放を正当化するイスラエルの主張、論理を支えることを表明した。

そして、約100名の帰還を認める、追放期間を半分にするというラビン政権の発表(二月一日)をクリストファーが即刻「国連決議七九九の内容に沿つたもの」であり、「もう安保理で討議する必要はない」、アラブ諸国は制裁動議を取り下げる、和平に集中するようにと対応したのである。クリントン政権に公正さを期待していたアラブ諸国にとって、これは横一面を殴られたようなものである。

時期が逆になるが、ラビン政権は、対PLO法の改正を行い(一月十九日)、一月中旬のパリでの化学兵器禁止条約に調印してみせた。だが、それらは追放問題からの国際的な非難をかわすためのポーズ、煙幕でしかない。たとえば、同法の改正後にエビ・ナタン氏がアラファト議長と電話会見し、アラファト議長の直接討議を行った(一月二一日)。が、ラビンは「PLOとの対話などありえず、テリトリーカーの代表団だけである」という対応を続けているし、改正後初の議員としてアラファト議長と会見したダヤン女史に対しても、「労働党のイメージを破壊した」と食つてかかつたと言っている。パリ条約においても、イスラエルの核が問題にならないことから、アラブ側の化学兵器志向への国際的な非難をさそうことが狙いなのには明確である。

國務省内では、一月二十五日の提言の後、ガーリ事務総長に対して「第三世界主義者」とレッテルを貼つたり、「国連はアラブ連盟ではない」と非難する声があるという。

クリントン政権は、中東和平の推進、国際的な民主主義の推進を掲げ、その打倒の対象を原理主義においている。民主主義的な選挙で原理主義者が勝利したアルジェリアでは、非常事態宣言をもつて民主主義を否定してから、すでに一年が過ぎた。そしてなお非常事態法の継続の必要性を強調している。このような民主主義に反するあり方が国際的な支援をえているのは、

対象が原理主義者だからである。ラビンがハマスを国際テロと喧伝し、クリントン政権に追放を承認させたのも、対テロ、対原理主義という大義名分をもつてのことである。ここにクリントンのいう民主主義や和平の眞の姿がくつきりと浮かび上がってくる。

では、シオニスト側はその策謀がうまくいつて安泰なのかといふと、まったくそうではない。ラビンは最近「怒りっぽい男」と言われている。シオニスト側はその策謀がうまくいつて安泰なのかといふと、まったくそうではない。ラビンは最近「怒りっぽい男」と言われている。また、閣議で追放問題での制裁回避を討議しているとき、発言しようとした法相バイに「君はすでに十分な害を出した」と発言させなかつたという。右派議員からの批判に対しては、「追放は継続する」と怒鳴り返したという。他にもあるが、それらは、国際的な非難をかわそうと汲々としているだけでなく、ガザをはじめとするイスラエル軍の虐殺や人権侵害に対する連立内左派からの批判、右派からは、「テロ組織、アラブ政権、左派閣僚への投降」、「原理主義者のテロを勇気づけ」た、「イスラエルが威信を失い、過激なアラブが頭をもたげて活動するような方法での取扱い」「虚偽」と導くなどなどといった非難のなかで、パンク状態になつてゐる証拠である。他方のクリントン政権も、「今や和平に集中する時」、「中東での和平の創出を最優先課題とする」(二月九日、クリントン)、「和平過程の再開は早い時期に可

米国にそそのかされたクウェートの挑発と、それに乗せられたかのよう、サッダム・フセイン政権の直反応。チャンス到来とばかりに、ブッシュ政権は、英仏を従えて、イラクへの空爆を開始した。だが、その初日の一月一二日に、バトラのアパートを誤爆(?)し、多数の死傷者を出した。

アラブ側は、アブデル・マギド=アラブ連盟事務局長が「安保理決議をイスラエルに対して強制すること」と「イラクに対するそなした大きな興味」との落差を非難したことによって、米西側の予断と二股政策への批判を展開した。

にもかかわらず、米政権は、イーグルバーガーがイスラエルに追放問題を解決するよう求めるまやかし策動をとも一方、サウジがイラク空爆に沈黙を守つてることをいいことに、再びイラクへの攻撃を行つた。が、あるうごとか、今度は、国際報道陣のたまり場、ラシッド・ホテルに命中。当初、(ザフアラニアの核施設を狙)

このように米国は、追放問題から世界の目をそらせ、アラブ内の矛盾を煽ろうとしたばかりか、公然と内政干渉をもうちだした。が、それは、アラブ諸国からの怒りの声とアラブの統一の方向をさうことになつてしまつた。

他方、被追放者たちは、「イラクに対する戦争は、イスラエルとその非人道的な追放に対する国際的なメディアの圧力を回避することを狙つたもの」であり、そうした敵の策動を許さない、「安全地帯」のズムラヤ検問への帰還のデモを展開したり、キヤンブ名を変えたり、「イスラエルに帰還を強制せよ」とレバノン軍の検問へのデモを展開したり(資料参照)じ、それ

「われわれはイスラエルの最高裁から公正さなどえたことはない」とアシュラウイ女史や被追放者たちが非難し、他方では、「仮に最高裁判決が違法とみなしても追放は安全上の理由で撤回

にもかかわらず、クリントン政権は、今や和平に焦点をあてるべき時だ」とうそぶき、クリストファーを中東に歴訪させると発表した。クリントンは和平を推進すると言つたが、いつたいどんな和平を押しつけようというのか。今号ではそうしたところに焦点をあてつつ、展開したい。

## 一 追放問題の解消策——イラク空爆とアラブの意外な(?)反応

それでも、米軍のイラク空爆は継続され、クリントンもブッシュのイラク政策を引き継ぐと発表。ブッシュは、クリントンへの政権委譲の直前に、反サッダムのクーデターをも提言した。これに対して、イラク側は、クリントンへの善意のしるとして一方的な停戦を宣言。クリントン政権も、イラクの対応に変化ありと認めざるをえなくなつた。

このように米国は、追放問題から世界の目をそらせ、アラブ内の矛盾を煽ろうとしたばかりか、公然と内政干渉をもうちだした。が、それは、アラブ諸国からの怒りの声とアラブの統一の方向をさすことになつてしまつた。

他方、被追放者たちは、「イラクに対する戦争は、イスラエルとその非人道的な追放に対する国際的なメディアの圧力を回避することを狙つたもの」であり、そうした敵の策動を許さない、「安全地帯」のズムラヤ検問への帰還のデモを展開したり、キヤンブ名を変えたり、「イスラエルに帰還を強制せよ」とレバノン軍の検問へのデモを展開したり(資料参照)じ、それ

は特使を派遣し、イスラエルへの説得を続けてきた。しかし、ラビン政権の対応は国際法や国連決議よりも上の位置に自らの決定を置くものでしかなかつた。そうした結果が、上記のガーリ提言となつたことは言うまでもない。

ガーリ提言とアラブ諸国からの制裁を求める動きに對して、在イスラエル米大使ハロップは、「現在までいかなる米政権もイスラエルに対する制裁を許さなかつた」し、クリントン政権がそうすることは「ほとんどありえない」と発表。ガーリ提言とアラブ諸国からの制裁を求める方向をさすことになつてしまつた。

國務省は、ガーリ事務総長がそうした努力が無駄だったとして提言に踏み切つたにもかかわらず、「外交努力での解決を」主張し、「制裁は和平を破壊しかねない」とラビンの論理をそのまま繰り返した。これに勇をえたラビン政権は、まず安保理での討議の引き延ばし策動を展開した。

「われわれはイスラエルの最高裁から公正さなどえたことはない」とアシュラウイ女史や被追放者たちが非難し、他方では、「仮に最高裁判決が違法とみなしても追放は安全上の理由で撤回

能」（同日、クリストファー）と言つておきながら、その同じ日に、多国間交渉の延期を発表せざるをえなかつた。

部分的な帰還と追放期間の短縮は、イスラエルー米ーエジプトの合作と言われるが、エジプトがラビンの妥協の少なさ、それゆえのアラブ側の怒りの大きさから、ラビン批判の側についたとも言われている。

**三 統一が問われるアラブ側**

一月一一一二の両日開かれたアラブ連盟外相会議は、意外な展開を示した。

エズ＝レバノン外相が、「イスラエルは、新しく交渉すべき要因を付加することによつて、確認された和平過程を空洞化しようとしている。安保理決議一二二、三三八、四二五は忘れられ、焦点は七九九」のみになるということを許してはならないと、「アラブの統一的な立場」をもつて、国連憲章第七章に沿つて「七九九の遵守の期限を一ヶ月」とし、人道的な援助への圧力などを提案した。また、カドウミ氏は、「七九九の遵守がなされない限りパレスチナ側は交渉への参加を拒否するし、他の諸国もそうするよう」求めた。

こうした動きに対し、シャラーリー・シリア外相は、「追放はイスラエルが和平過程に逆行し、それに打撃を与えた」としつつ、交渉を中止するのならまず多国間交渉から、その方がイスラエルにとつて厳しいと提案。このシリア提案は、エジプト、サウジ、ヨルダンなどから反対を受けた。

#### 四 公正なきところに平和はない

米＝イスラエルの策動（自ら「ペッケージ取引」と称している）に対し、パレスチナ側は、異口同音に、「決議七九九は全員の即時の帰還を要求している。そうでないものは解決とは言えない。これは七九九を欺くものでしかない。国際法、国際的正当性を反古にするシオニストの策動を許すな」と非難している。さらに、一名のリストに入っていたとして、「安全地帯」のマルジャヨーンの病院に入院していた五人を、イスラエル側は強制的にイスラエル内の獄中に移送してしまつた。追放者たちは、寒さと劣悪な生活環境の中で、健康を害し、日々の生活にも支障をきたしながらも、全員参加の會議でラビン提案への拒否を決定し、シオニストの策動と断固闘い抜くことをはつきりと示している。

皮肉なことに、ラビン政権が一〇一名のリストを国際赤十字に手渡したその日に、仮は、第二次大戦時のユダヤ人の移送を非難し、移送された者の記念などの措置を発表した。

他方、ガーリ提言で追放とともに非難してい

して一致しているわけではないし、（資料に示されるように）パレスチナ内にもいろいろな問題が存在しているのは事実だが、追放問題と米＝イスラエルによるその処理の仕方はアラブの、さらにはイラン、トルコをも含めた地域の協調体制を作る方向へと向つており、それを本当に活かすことが問われている。

「追放によってテリトリーでの暴力行為は鎮静化した」と発表したラビンは、自分の言つたことを忘れたかのように、連日の弾圧、「集団懲罰」を繰り返している。しかし、侵略と占領、民族的権利、人権などの無視、つまり国際法、国際的正当性の無視は人民の鬪いを大きくする恐怖に追いつむまでになつてゐる。一月一九日のブッシュ政権最後の人権報告でも、九二年に、暴力行為は減つたが、イスラエル軍による殺害は極端に増大し、「特務」によるものがその三分の一近くを占め、三分の二は非武装の者だつたし、追放、拷問、「行政逮捕」、家屋破壊などとのジュネーブ条約違反を批判せざるをえなかつた。また、パレスチナの人権運動は、一月二九日ガザで、「特務」を含めた部隊が逮捕（無抵抗）後、手錠をかけ、通りに連れだして射殺した（ちなみに軍は、彼が銃を抜いたので射つたと発表）。また、死者の葬式デモへの発砲で多数の死傷者が出ることも多い。最近、死傷者は、

上述したように、イラクへの空爆と追放問題でのイスラエルへのあり方に示された米国の対応の落差に対する非難をしつつ、アラブ諸国内にはクリントンへの期待が少なからずあつた。新国務長官のクリントンが、シオニスト陣営からは「親アラブ」とレッテルを貼られていて、逆にアラブ側の期待をそそることに成功した。（だが、クリントン政権内の「親アラブ陣営」に対しては、親イスラエル陣営が陰に陽なたに策動し、完全に足かせをはめているという。検事総長を巡るゴタゴタは、「親アラブ陣営」への脅しでもあるという。）

しかし、追放問題に関するガーリ提言に対する米＝イスラエルの上述したような方針は、そうした期待をブチ壊すことになった。アラブの諸新聞は、「イスラエル提案は安保理決議に沿う意志のないことを証明しただけではなく、世界最強の国が保護を与えていることを証明したが、被追放者のわずか四分の一が対象になつたように、和平過程が土地、住民、その他諸々の四分の一のための交渉だというのなら、はた

け、結局、交渉からの撤収問題には言及しないことになつた。

こうした意外な感じのシリアの対応に関しても、いくつかの新聞は、「シリアは、クリントン側から好意的な約束をえていたからであり、逆に言えば、交渉からの撤収の音頭をとれば、原理主義の国＝イランとの関係をもつて非難の鉢先を向けられることになるので、それを回避したのだ」という分析をしている。

上述したように、イラクへの空爆と追放問題でのイスラエルへのあり方に示された米国の対応の落差に対する非難をしつつ、アラブ諸国内にはクリントンへの期待が少なからずあつた。新国務長官のクリントンが、シオニスト陣営からは「親アラブ」とレッテルを貼られていて、逆にアラブ側の期待をそそることに成功した。（だが、クリントン政権内の「親アラブ陣営」に対しては、親イスラエル陣営が陰に陽なたに策動し、完全に足かせをはめているという。検事総長を巡るゴタゴタは、「親アラブ陣営」への脅しでもあるという。）

しかし、追放問題に関するガーリ提言に対する米＝イスラエルの上述したような方針は、そうした期待をブチ壊すことになった。アラブの諸新聞は、「イスラエル提案は安保理決議に沿う意志のないことを証明しただけではなく、世界最強の国が保護を与えていることを証明したが、被追放者のわずか四分の一が対象になつたように、和平過程が土地、住民、その他諸々の四分の一のための交渉だというのなら、はた

してアラブ側はそした交渉にどれだけの価値を見いだすだろうか」と批判し、さらに中東和平を最優先課題としているからクリストファーの歴訪が予定されたといつた論理に対し、「アラブ側は和平を望むが、その和平は国際法の基礎の上に成立する。米がこの原則を尊重すると逆のなら、クリストファー（の歴訪）は成功に反するのなら、中東和平過程の破綻へと導く」と警告した（ティシユリーン紙）。

二月九日、ムバラク＝エジプト大統領は突然ダマスカスを訪問し、アサド大統領との共同記者会見で、追放問題、和平過程、イラクとの関係、イランとの関係などを含めて、アラブの統一的な対応を作ることを協力し、強化していくことを発表した。これと前後して、サウジ皇太子、クウェート外相、アラファト議長、レバノン首相がカイロやダマスカスを訪問した。

さらに、二月一〇日には、ダマスカスで、シリヤ、イラン、トルコの三カ国外相会議が開催され、米によるイラクを三分割する措置に反対した。ベラヤティ＝イラン外相は、この外相会議が「部外者ではなく、地域の人民こそがそこで問題を決定することを西側に対して告げる」と警告した（ティシユリーン紙）。

メッセージ」としてあつたと言つてゐる。他方、アッサフィール紙は、米はトルコに対して参加するなどいう圧力をかけていたが、それを振り切つての参加であつたと伝えてゐる。

この節の最初に示したように、アラブ側が決

して、レバノン南部でも作戦展開が拡大。iran革命の一四周年、ムサウイ師虐殺一周年を控えていることもあるが、人民の怒りの爆発とイスラエル内からの危惧の声はそのことを如実に物語つてゐる。

そうした被占領地での人民の鬪いに呼応して、レバノン南部でも作戦展開が拡大。iran革命の一四周年、ムサウイ師虐殺一周年を控えていることもあるが、人民の怒りの爆発とイスラエル内からの危惧の声はそのことを如実に物語つてゐる。

クリストファーが、米国をベースにした人権運動、ミドルイースト・ウォッチが「極悪の国際法違反」と呼んだ追放からちょうど二ヶ月目の二月一七日から、中東を歴訪して、和平の再開に向けた調停工作を行うという。安保理決議七九九をうやむやにし、ガーリ提言をゴミ箱に放り込んでおきながら、いつた二四二、三三八、四二五に対してもどうしようというのであるうか。イスラエルの占領、人権侵害、追放、虐殺などなどを容認するような「和平」は和平の名に価するであるうか。

「公正なきところに平和はない」と掲げたの

は、昨年のロスアンジェルス暴動の際の抗議デモであったが、シオニストの策謀は二股政策への非難を呼び、まさにそのスローガンの大切さを浮かび上がらせている。一月二六日にはバシリユ氏は、「和平会議、ユダヤとの共存はなされねばならないが、それは米が敷設した基礎の上ではなく、国連決議、国際的な正当性を基礎にしたものでなければならない」旨強調した。

最初に紹介したように、「公正」を自称するクリントンの政策には、早くもいろいろなところから怒りが噴出している。人民の下からの力で、国際法、国際的な正当性を踏みにじるシオニストの陰謀を許さない闘いを展開していくことが、中東はもちろん、全世界的に問われている。

## 資料

### 追放非難の諸声明

「その一」  
パレスチナ国、民族統一指導部による  
呼びかけ、第九〇号

最も恵み深く慈悲深い神の名において——インティファーダの声ほど大きな声はない

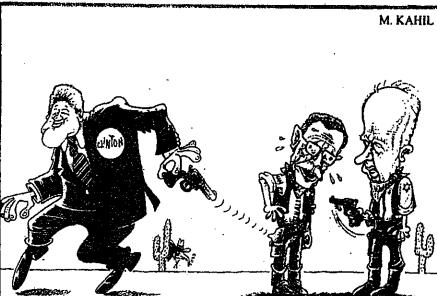
「われらが英雄的人民大衆」

シオニズムの占領をパレスチナの地から駆逐すべく、また、民族自決やわれらが人民の唯一

正當な代表＝PLOのもとでの聖地エルサレムを首都とした建国をはじめとする、われらがパレスチナ人民の正當な民族権利を獲得すべく、そのための方法と不可避の独自決定として、祝福されたインティファーダの旗を掲げ、血と受苦とをもつて、その基礎を据えてきた。

「インティファーダの英雄たち」

昨日、敵シオニストは、われらが人民の息子たちとその家族とに対する集団追放の決定を行い、弾圧をエスカレートさせた。これは、われらが人民の自らの土地における強固さに打撃を与え、その正義の闘いを抑えつけることを狙つた危険な新段階を画するものである。同時に、敵の失態と混乱を、そして、欺瞞的に和平堅持と言いくるめる、この人種的拡張主義体制の醜い



さとファシズムと、その野蛮で凶悪な手段とを顕わしたものである。

民族統一指導部（以下UNL）は、このイスラエルのエスカレーションを深刻に受けとめ、国連、特に欧州諸国に対し、直ちに介入しわれらが非武装人民に対してなされたこうした犯罪を停止せしめ、ジュネーブ第四条約の即時適用をもって、占領下パレスチナ人民への国際的保護を確保するよう、訴える。

こうした弾圧は、ラビンとその政府の素顔をあばき、敵シオニストの言う和平なるもののいつさいが、人民をその地から追放し、物質的精神性の存在を抹消せしめんとの殘忍な意図をおおい隠す虚飾でしかないことを如実に示している。

こうした点から、UNLは、パレスチナの指導者らに、イスラエルがわれらが人民の息子たちへの弾圧政策を正当化する隠れみのにしていられる、和平交渉へのパレスチナの参加問題に関し、新たな評価を行なうよう、訴える。

今回の思慮をまったく欠いた近視眼的決定がもたらす結果について、イスラエル政府、とりわけ弾圧、壊滅策の張本人たるラビンにいつさいの責任がある、とUNLはみなす。われらが人民は、イスラム抵抗運動（ハマス）の戦士たちに対する、そしてすべての人民の将来を脅かす、こうした犯罪に対して黙認するわけにはいかない。

「インティファーダの大衆」

パレスチナの地すべてにおいて占領軍への対

決をエスカレートさせ、侵略を足元から播るが

す火山、大火災へと転化させ、この醜惡な犯罪に報復するよう、全人民大衆に訴える。

UNLは以下呼びかける。

一二月一九日を、われらが人民の息子たちに對する犯罪－追放に対するゼネスト、および占領軍に対する暴力的対決の日とせよ。

一攻撃部隊は、占領軍との対決を激化させ、今後一〇日間を、反占領の炎と怒りの爆発の日々とせよ。

一パレスチナ国全土での暴力的大衆デモをはじめ、各種大衆行動の組み合わせ、赤三日月本社での座りこみなどを組織せよ。

一民族的諸勢力は、記者会見などで、イスラエルの決定の危険な性格、結果を明らかにせよ。

一大衆的幹部、諸機関は、諸外国の領事と直ちに会見を行い、また、国連および安保理と連絡をとり、今回の弾圧決定の撤回および被占領下人民への国際的保護の原則を訴えよ。

一アラブ、イスラム諸国には、われらが人民の息子たちに対するその責任を分かつ、われらが被占領下人民の強固さ、弾圧拡大との対峙への保証、保護と支援の諸措置を訴える。

\*「誤まりを犯した者は、どこに戻るかは知ることになろう」——全能の神は眞実を語り給うことになる

UNL／パレスチナ国

九二年二月一七日

### 「その二」

#### UNL＝ハマス共同声明

被追放者の呼びかけ——最も恵み深く慈悲深い神の名において

「われらは正義をもつて悪に立ち向う。そして、正義は悪を打ち負かし、消し去る。」

インティファーダの声ほど大きな声はない

最近の諸事件、われらが人民に対するイスラエルの弾圧、特にハマスに対するこの間の攻撃、占領下ガザ回廊のわれらが人民への包囲、われらが戦闘的パレスチナ人民の息子たち数千人の投獄、数百人の追放、そして市民に対する無差別砲撃によって殉教者六名、負傷者数十名をうみだしたハム・ニニスでの恐るべき大虐殺、これらについて、われらは、壊滅政策の導入者、子供たちの殺人者、集団追放政策の立案者であるラビン政府にいつさいの責任があるとみなし、彼の国際法廷への戦犯としての訴追を呼びかける。

（われらが人民よ）

UNLとハマスとの間での協力・協調が成立した。追放された兄弟たちの帰還のため、占領の抑圧に抗するため、諸施策が統一され、あらゆる闘争がエスカレートされるであろう。われらは、われらがパレスチナ人民大衆、全党派、全階級に、以下の諸活動を呼びかける。

第一に、これまでUNLとハマスが呼びかけた大衆ストはキヤンセルされ、ストの日々は闘いの総体的拡大の日々にとつてかわる。

UNLは、これまでUNLとハマスが呼びかけた大衆ストはキヤンセルされ、ストの日々は闘いの総体的拡大の日々にとつてかわる。

歳！

\*神は偉大なり。神を称えよ。

\*われらが人民の輝けるインティファーダ万歳！

民族統一指導部（UNL）

イスラム抵抗運動（ハマス）

ヒジュラ暦一四一三年

一九九二年一二月二〇日

第一に、赤三日月本社、特にわれらが国家の

三、敵をして人種的弾圧政策を放棄せしめ、  
安保理決議七九九の履行を余儀なくさせるべく、あらゆる所で圧力をかけていくよう、すべての友好諸国、イスラム、アラブ諸国に求める。  
われらは、追放された兄弟的戦士全員に、そして祝福されたインティファーダの闘いに、あいさつを送る。被占領下の郷土におけるわれらが堅忍不拔の人民に、そして鉄格子の中にある堅忍不抜の獄中者全員に、大いなる敬意をもつてあいさつを送る。  
われらは、また被追放者たちと間髪を入れずに団結した最初の人々であるアラブ・レバノン人民大衆とそのイスラム的民族的諸勢力にあいさつを送る。

一人一人への敬意を表し、（一〇）総編は  
下の諸活動を宣言する。

一、敵の郷土空洞化－人民追放政策に対し、  
一二月二三日を被占領パレスチナにおけるゼネ  
ストと大衆的憤激の日、ヨルダン、シリア、レ  
バノンにおけるゼネストの日と宣言する。

二、大衆活動やデモ、国際機関、地域機関へ  
の覚え書き提出などを通し、被占領下の郷土外  
のあらゆる居住地において、敵の人種的弾圧  
政策、特に追放政策へのわれらが人民の怒りの  
表明を継続する。

## ハマス、PFLP、DFLPの三組織による政治声明

\*全面的な解放まで革命を！  
\*忠実なる殉教者よ、榮光あれ！ 不滅たれ！

銃弾を射つ、内なるわれらが人民の息子たち、あるいは友好的兄弟的勢力を通じてインティファーダとわれらが祝福された革命とに連帯と支援を示す、外のわれらが人民の息子たち、その

敵に向かって石を投げ、ナイフをふりかざし、  
与えないようになることを訴える。

一〇組織は、行政的自治策動を粉碎すべく、英雄的インティファーダをもつて、被占領下の郷土での闘争を継続していくことを強調する。また、パレスチナの土地と人民の一体性のための闘い、そして裏切り的マドリッド－ワシントン路線への闘いをも強調する。一〇組織は、パレスチナの有力指導者、および交渉團に対し、交渉から直ちに撤退すること、何らかの背信行為を走るアラブ政権とはハからなる隠しきのをも

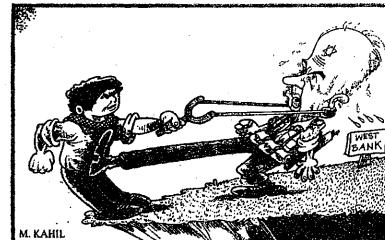
ンティアーダへのあらゆる支援とアラブーシオニズム対立に対する責任をも担うよう訴える。

ようにならないことを期待する。  
われらは、国際社会並びに全世界の解放勢力  
に対し、被追放者の帰還に向け、敵に圧力をかけ  
るよう訴えるとともに、イスラム諸国、アラ  
ブ諸国には、それのみならず、活発な連帯、力  
の統一そして被占領下の郷土における英雄的イ

も参加した討議の結果に關しても討議した。民族的イスラム的な勢力は、不当な解決や行政的自治なるものに反対し、交渉における在チュニスの「指導部」のあり方、とりわけ追放問題に関する対応のあり方を非難した。自ら袋小路に陥つたにもかかわらず、彼ら「指導部」は、交渉からの撤退や包括的な民族的対話へと至る代わりに、投降の政策の継続にしがみつき、交渉の継続と被追放者の問題は分離すべき、などという声さえがでた。

こうした民族的でも責任ある政策でもないあたり方を目前にしているがゆえに、一〇組織は、領内外のわれらが人民に、民族的意識性、団結を強化し、われらが人民と大義、その偉大な成果たるPLOの政治的位置のいっさいを破滅させるような道を拒否し、打ち破るよう呼びかける。

同時に、栄光あるインティファーダを継続し、その能力、大衆性、質を発展させ、テロリスト政府が捏造している策謀と対決することを呼びかける。奴らの意図は、われらが大義、権利、アイデンティティ、民族的団結において、われらが人民が強固な立場を堅持して闘っている、栄光あるインティファーダを停止させることにある。われらが人民大衆は、四八年



\*被追放者たちの郷土と家族のもとへの帰還をかちとるため、闘いと連帯の輪を拡大せん！

\*栄光のインティファーダに勝利を！ 殉教者に榮誉を！

パレスチナ一〇組織

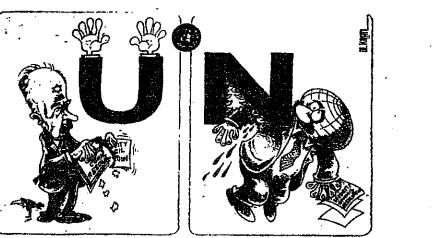
機関と人権団体は、シオニズム擬制国家への実践的圧力をもつて、被追放者の帰還と追放政策の停止を強いなければならない。

第二。インティファーダは恒常的闘争の一形態であり、堅持されねばならない。それは、敵とその計画に對決し、占領を打破し、民族自決の達成へのわれらが人民の決意、その暴力的大衆的表現であるがゆえに、その継続、發展、激化に注意を払つていかねばならない。

第三。交渉からの即時撤退を基礎に、われらは民族的イスラム的党派、勢力、パレスチナ人すべてに對し、民族的対話を呼びかける。この対話は、民族的團結を確保し、同時に、大衆諸階級諸階層の生氣あふれる力の統一を通じ、帰還、解放、自決、建国の権利と、パレスチナ人民の包括的民族的枠組みであるPLOの防衛をわれらが断固堅持していくことを鮮明にするものである。

第四。われらは、交渉からの即時撤退、自治政府形成に係るすべての委員会の解散、そしてわれらが大義への打撃と、「解決」への隠れみのを与えた後とはいえ、交渉団員たちがパレスチナの戦闘的人民の懷に再び戻ることの必要性を強調する。

「われらが英雄的パレスチナ人民、戦士たち！」



は民族的イスラム的党派、勢力、パレスチナ人すべてに對し、民族的対話を呼びかける。この対話は、民族的團結を確保し、同時に、大衆諸階級諸階層の生氣あふれる力の統一を通じ、帰還、解放、自決、建国の権利と、パレスチナ人民の包括的民族的枠組みであるPLOの防衛をわれらが断固堅持していくことを鮮明にするものである。

われらは、一貫した戦闘的立場から、われらが英雄的人民大衆に対し、英雄的インティファーダの激化と、われらが堅忍不拔の人民の息子たちである戦士四〇〇名以上に対するのを最新とする追放・空洞化政策との対決にうつて一丸となること、敵・強奪者に対し團結してあたることを呼びかける。

\*勝利と解放の途上にある、止むことなき祝福のインティファーダ万歳！

\*敵の追放・空洞化・再定住政策粉碎！

\*忠実なる殉教者に栄光あれ！

\*パレスチナの大義抹消策動粉碎！ 妥協路線粉碎！

イスラム抵抗運動（ハマス）

パレスチナ解放民主戦線（DFLP）

パレスチナ解放人民戦線（PFLP）

## 一〇組織声明——神の名において

イラ・ル・アマーム誌、

九三年一月八日

一〇組織のフォローアップ委員会は特別に会議を開き、最新の政治状況、とりわけパレスチナの大義に関わり、かつ直面している重大な問題である、追放問題について討議し、その闘いの立場と郷土における闘いを強化する諸政策と決定を行つた。

一〇組織は、被追放者たちが示す闘いへの確信と郷土への帰還の権利の主張に賛同とあいさつをおくる。それらは国際法や諸決議、人権に

関する条約などの正当性に裏打ちされたものである。彼らは、厳しい天候、水や食糧、暖房、医薬品の欠乏、それらが原因となつての病気や死にさえもさうなまれるという、非人道的な情況下におかれつつ、闘つてゐる。それに對してシオニスト擬制国家が、被追放者の即時の帰還を命じた安保理決議七九九への挑戦をしてきてゐること、そしてそれに国連が沈黙していることは怒りを禁じえない。

一〇組織はまた、被追放者の帰還への努力をなし、連帶を表明するすべての党派、勢力、個人に対して、あいさつと感謝をあらわす。とりわけ、レバノンの公的、大衆的な立場に感謝を表明する。同時に、レバノンの政府と人民に、犠牲者の家族、民族的イスラム的なレジスタンスに対するシオニスト擬制国家の策謀をうち破り、被追放者が彼らの郷土に帰還すること、つまり安保理決議七九九の適用以外の道はないことを、支持し続けるよう呼びかける。

レジスタンスの継続は、一方でシオニストの人種主義的性格を鮮明にし、他方で国連決議に對する米政権の実体を明確にしている。米政権は、人権をうたい文句にしてはいるが、国際的組織を取り込み、国際機関をして、シオニストの軍事行為を保証し、人種的で拡張主義的な政策を支援し、われらが民族とその大義に關する問題にはまつたく異なつた基準をもつて対処せんとしていることが明確になつてゐる。

このことと関連して、一〇組織は、最近チュニスで行われ、一部の民族的イスラム的な勢力

## パレスチナ指導者会議の結果を批判する（抄）

以来連綿と続く侵略と占領下での苦悩を取り払うためには闘いを貫徹し、郷土、アイデンティティ、民族的権利の統一的な実現以外にないことをはつきりと自覚し、かつそれを日々証明しているのであり、そのことを、一〇組織は称え、われらが人民と大義が直面している多くの危険性の前で、一〇組織は数多くの対策と決定を行つてきた。その中には、当然のことながら、今回の追放問題もあり、われわれは支援委員会を設置し、民族、パン・アラブ、イスラムといつたレベルで、彼らの郷土、家族のもとへの帰還というまつたく正当な権利の主張と、それへの支持の拡大を担つてゐる。

今会議は、一〇組織の共同した闘いを発展させることの重要性についても確認した。あらゆる種類の闘い（その頂点にある武装闘争を含め）をもつて、パレスチナ問題の「解決」なるものや行政的自治なるものに終止符を打ち、破滅的な道程の守護者、保持者たちから民族の大義を救わん。

四組織は、ラビンのファッショの攻撃に抗しているインティファーダの人民大衆とこの英雄的抵抗をいたる所で支援しているわれらが人民による大衆的総力戦とその勇気と誇りにあいさつを送るとともに、イスラエルの傲慢を許して求めた安保理決議七九九への拒否姿勢を貫いていることについて、討議した。

都合主義を非難する。これら諸機関は、イスラエルを国際決議に服させるための、あるいは、寒さ・飢え・疾病・無差別砲撃故に生命の危険にさらされている被追放者を保護するための、現実的な措置を講ずることに、逡巡を示していない。また、追放問題の解決に向けた国際社会への圧力という面で、アラブ・パレスチナ側の公的動きも、明らかに実効性を欠いてゐる。今回の問題は、それ 자체が大きな問題であるうえに、将来の集団追放政策の幕あけとしての人道的政治的危険性を伴つたものである。したがつ

4、ペレスチナの統一的立場を基礎として、二国間、多国間交渉と共に拒否するアラブ側の立場統一に向け努力すること。インティファーダを支え、国際的合法性に則った包括的和平の諸基礎を堅持すること。さらには、ペレスチナの統一された民族的立場への支援をうるよう、アラブ諸国民とそのイスラム的、民族的勢力に運動の激化を訴えること。

5、パレスチナ・レベルで、民主主義に則ったPLO諸機関の再建と団結を支えるため、包摵的民族対話を深化させること。

民主的四組織は、以上の諸点を民族救済に向けた現実的計画の構成項目として、われらが人民大衆とそのイスラム的、民族的勢力に提出するとともに、マドリッド－ワシントンの背信的計画に反対するすべてのイスラム的民族的勢力との共同活動、協調を進め、自由と独立への道程下、祝福されたインティファーダの発展と行政的自治構想粉碎、再定住・追放・正常化諸計画粉碎に向けたわれらが人民大衆の動員を継続すべく、一〇組織の結束と更なる結集をいつそう強化していく。

## 特別レポート——被追放者の現状

(一月二二日のA.P.、パレスチナ各組織の機関誌、レバノンの新聞などから、編集部の方で特別レポートとしました)

強制収容所にようこと」という横断幕が掲げられた。「早急な帰還のためのエルサレム・キャンプ」からテント村の名前を変えるのだといふ。前日のイスラエル側の前線へのデモに続くこの措置は、国際的な関心がイラク問題へと流れているのを追放問題へと引きつけるための一だ。

イスラエルから追放されたハレブチナ人が、彼らをナチに殺されたユダヤ人になぞらえるのをあまりではという問いに対し、被追放者の一人で、西岸のジェニンでジャーナリストとして働いていたH・アブーシ（二九歳）は「われわれはシオニストと報道戦争にある。イラクにする合同軍の戦争のタイミングのひとつは、



「作戦を開拓する」と答えた。

九年二月三日

パレスチナ解放人民戦線 (PFLP)  
パレスチナ解放民主戦線 (DFLP)  
パレスチナ人民闘争戦線 (PPSF)

九二年二月三日

を行つたりなど、よりいつそうの注目を集める

はよ 理さ 町で のか に変

ンプ て、力も日々 彼といです

七歳「こ」の生スルのよりつと

レバノン軍の最前線とイスラエルが勝手に宣言している占領地＝「安全地帯」との中間に設置されたキャンプは五〇のテントで形成されているのだが、彼らは近くの村へ買い物に行くこともできない。

彼らの劣悪な状況が近いうちに終わるといいかなる指標もないが、ペレスチナ人たちは非常に元気な精神を保つており、可能な限り正常

1993年3月31日 第87号 月刊 中東レポート

月刊 中東レポート

安保理決議七九九の即時履行を迫り、かつ被迫放者の帰還までの暫定的保護を国連軍に命じる新たな決議を安保理が採択するよう、そして、そこへ向けた国際的な働きかけが行われるよう、呼びかける。

これに関連して、最近チュニスで開かれたパレスチナ指導者会議とその声明についても討議した。同声明は、真摯な手段と團結したパレスチナ人の隊伍をもつて集団追放政策との戦闘には、なんら有効な現実的政治的立場を示していない。PLO有力指導部は、闘いの危険に断固として立ち向かう決定的結論に至ることができなかつた。彼らは、民族的基本を無視した破滅的、敗北主義的、分裂主義的政策の継続を強調し、恥ずべき裏切り的交渉路線のみを堅持しようとしました。

裏切り的解決に反対しているイスラム的、民  
主的勢力のいくつかも、このチュニスでの会議

憲章の広場に立ち帰るという、この絶好の機会においてしかし、PLOの有力指導部は、逆に、彼らの敗北主義的、分裂主義的政策によつてもたらされた状況の、その場しのぎの解決のためにチュニス会議を利用し、責任逃れに汲々とし、ラビン政府による破壊戦と集団追放、そして和平交渉に対するわれらが人民の憤激の高まりを緩和するために、この会議を利用しようとした。この有力指導部は、蚊の鳴くような声で行つた交渉中断の声明さえ撤回し、追放問題を切り離しての交渉継続もありうるとさえ宣言した。さらには、集団追放政策との闘いの重大性を強調した声明を出すことを妨害さえした。革命、PLO、そしてインティファーダの成果に対する自滅的政策の継続という、この有力指導部の行き過ぎは、すべてのイスラム的、民主的勢力に、背信的構想、破滅的交渉路線に対する断固たる抵抗を求めている。堅忍不拔の諸勢力とファタハ運動の忠実なるメンバーは、わざらが人民の民族的大義とインティファーダを守るべく、また、分裂・自滅政策にとつてかわる民族的政治的戦闘的計画を鮮明に提起すべく、隊伍を整え、団結を支えるイニシアチブを発揮しなければならない。

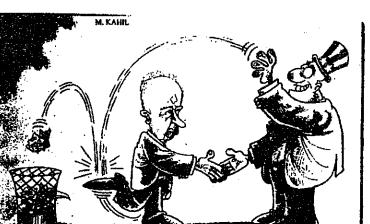
現実的民族的代案の骨子は以下の通りである。

第一に、マドリッドーワシントンの清算的文書に基づいた交渉から直ちに撤退しなければなく、隊伍を整え、団結を支えるイニシアチブを

第二に、すべてのイスラム教徒が、よつて呼びかけられた匂ふること。その目的は、PLOのかつ、民族的合意による民族的團結を支え、以下の政治計画を確立することである。

1、英雄的インティフアダ、顕在力、潜在力を動員しての力量をよりむけることが、現状においてはペレスが、現状においてはペレス

2、帰還・自決・建国の他の構想、解決のいつまでも遅い問題を国連に返すこと。それは、マドリッドワシントンで開かれた会議によって、行という基礎の上に、かかれていた問題の不変の権利が実現されるよう、その民族的大義に係るいっさいの討議においては、パレスチナの不可分にして独立した代表権とわれらが人民の唯一の正当な代表としての PLO の役割が承認されるところ。こうした基礎の上に進められるべき国連主催下の真の和平過程の実現に向けて、国際社会に訴



ハマドは一・三歳だが、「これは遊びではない。とても深刻なことなんだ」、「われわれはわれらが土地を解放しようとしている。誰もが毎日ここに来て石を投げる。それがわれわれの義務なんだ」と言う。

「父は数年間獄中にあるし、兄弟の一人は射たれて麻痺状況にある」という彼も実弾を頭に受けての死だ。

らプラスチック弾をひざに受けた。彼は他方側のジーンズをたくしあげて、古い「戦争の傷」を見せ、「また戻るさ」と力強く、笑顔を見せて言い切った。

こうした子供たちは、二五年にわたる占領に反対する、この五年間の闘い＝インティファーダの象徴的な英雄たちなのである。

死傷者の脅威的な増加に、パレスチナの指導者たちは軍のあり方を非難している。

今月、一六歳以下の子供五人が射ち殺され、数百人が負傷した。インティファーダの発祥の地、ジャバリア・キャンプ生まれのA・ヤグリは、子供たちの死をも恐れぬあり方を簡潔に説明した。「あまりにも多くの父親や兄たちが犠牲中や負傷、死亡した。キャンプのどこででも貧困があり、食糧、金は誰にとっても常に問題であり、他方、兵士たちは規律がない」と。

パレスチナ人の精神科医I・サラジは「子供たちが軍と対決するのは決して英雄主義だけではない」、「イスラエル側がすべての子供を立ち上がらせている。誰にも容赦していない。誰もが、逮捕されたり、射たれたりなどの兄弟姉妹親戚を持っている」それが「暴力行為」の最大の心理的な要因だと指摘する。

彼の働いているところでは、八歳から一五歳までの子供たち三五〇〇名を対象に調査した。九一・五%が催涙ガスの洗礼を受け、八五%が家宅捜索を経験し、五五%が父親が殴られるのを目撃し、四二%が自らも殴られている。一九

かがイスラエルの獄中にあり、二%は自ら負傷している。子供たちの最も大きな怒りは、家屋の破壊であり、次に家族が殺されたり、追放されたり、父親などが殴られるのを目撃したりということが続くのだ、という。

「子供たちが活動的で、投石し、タイヤを燃やし、壁にスローガンを書くのは精神的には健康なのです。とりわけ、母親が活動的で、家族が何が起っているかを話しているなら、当然子供たちは政治的に目覚めるというわけです」。六五%が弾圧からくる不安を感じ、六二%が睡眠上の問題を抱えているというが、兵士を、すなわちイスラエルを恐れているのは三三%しかいない。



支援を表明する村人たちとは、彼らに食糧、医薬品、衣類、カメラなど、いろんな援助物資を運んできている。エネレーターさえある。しかし、ロバと人の背による運搬には限界がある。とくに天候に大きく左右される。食糧の到着が遅いときは彼らはじやがいもをゆでたり、揚げたり、煮込んだりして食べる。在庫管理を担当しているアブ・ザイン（二十九歳）は、「われわれ全員は、この地を離れた後は、少なくとも当面、ひよっとしたら永遠に、じやがいもを拒否するでしょう」と語った。彼はまた、精神を高揚させるための日刊「PEP TALK」（げんきなおしやべり）を書く担当のひとりでもある。

テントは彼らの出身地を基本にした分宿体制になつていて。イスラエル側は、ハマスとイスラミック・ジャーディ、支持が明確でない者の三

が、そんな様子はない。二二名で構成されるミニ議会は、決定が民主的に行われるよう、彼らが住んでいた各地からの代表でなっている。「ここではガザから西岸へはほんのちょっとだ」と一人が冗談めかしていう。「憎いシオニストの検問もないしな」と他がまぜかえす。

二〇名もいる医者は、医療団を形成し、病気やケガの者の治療に交替で当たっている。ただし、医薬品や医療器具は乏しい。病気の者用のテントもあり、そこだけは暖房施設がある。ス

石を集めて小さな舞台が造られた。アブーシュが言うには、一グループが彼らの状況にまつわる寸劇を準備中だそうだ。

A・F・オウェイシは、一五世紀に十字軍によってダマスカスから追放されたモスレムの学者の名をつけた「イブン・タيمiya大学」で日々の講義を行っている。この「大学」は岩だらけのところに汚いマットレスを何枚か並べてつくられ、イブン・タيمiyaのモットー「わが投獄は孤独、わが追放は旅行、わが虐殺は殉教」を掲げている。同大学は、このキャンプにいる大学生八八人のうち三五人の登録をもって、開始された。コースはひとつだけで、被占領地のどの大学でも必須課目である、「ペレスチナ研究」である。オウエイシは、ヘブロン大学の歴史学の教授であるが、自分はハマスを支持しているけど、ハマスとしての活動などしたこともなかつたと語った。もちろん(?)、彼は教材などをもつてきているわけではなく、九〇分の講義は彼の記憶によってなされる。最終試験は二月一四日に予定している、と彼は語った。が、天候に左右されるので先になる可能性が大きいとも。

大学以外にも、いろんな教室が組織されており、空手教室もある。

ひとつテントでは、日刊「新聞」が準備中である。二、三枚の手書きで、ラジオからのニュースが中心で、夕方に発行されるという。ダマスカスからの「ソート・アル・コツ」

（ヨルザレムの声が遠く）だ彼らの家族などの声を伝えてくれる。たとえば、彼らの一人に娘が産まれ、彼らのキャンプ地の名、マルジ・アツズホール（花の野辺）と名付けられたことなども伝えられ、当然、彼らの新聞にものる。が、中心は、イスラエル放送を聞き、その批判的な見解だという。

TVであれ、新聞社のであれ、カメラの前に彼らはよく集まる。決してミーハー的なせいではない、元気な姿を家族に伝えたいからだ。だが、TV局なり、新聞社なりの編集は、なかなか彼らの願いをかなえてはくれない。また、ペレスチナ諸組織の機関誌などに載つたものは、家族の目に触れる可能性は極めて少ない。

初めて運搬を担つた「村人」は、彼らの食糧ストックの多さにびっくりしたという。だが、他の人から、「自分の家と同じように考えてはだめだぞ、彼らは四〇〇名もあり、お前の家族の数十倍なんだぞ、わしらが背負つて運んだのだって一日分になるかどうかってどこだぞ」と言われて、改めてラビンの追放の犯罪性を認識したという。

二月七日から、猛烈な寒波が襲つた。何度も場所がえをしたり、石を敷き詰めたり、溝を掘つたりしたテントも吹き倒されたり、マットレスが湿つてしまつたり、なによりも薪木を探りに行く元気もなくなり、これではイスラエルの獄の方がましかなどという弱気な声も出たりした。そんな時、吹雪をついて村人が食糧を届けてくれた。新鮮なパンと缶詰のジャムでしかな

- ・イスラエル、PLOコンタクト禁止法の撤回。
- ・米国、ブッシュ最後の人権レポート、イスラエル軍による殺害の拡大、ジュネーブ条約違反などを批判（本文参照）。

ピースナウ、入植の拡大を非難。  
・米軍、再びイラクを攻撃、ラシッド・ホテル  
にミサイルが命中（本文参照）。  
一月一八日

・ガザ、人民の鬪い、二人死亡。  
・南部、レジスタンスの地雷攻撃。  
・イラク、また合同軍が空爆。

一月一九日

ガザ、人民の鬪い、一人死亡多数負傷。  
・ 追放問題、二ヵ月目に。被追放者、イエ  
ル側への追放非難、帰還のデモ。他方、  
リアの労組代表一名がキャンプ村を  
し、一万ドルを手渡した。

・イスラエル、ネタニヤフのスキヤンダル、「ビゲート」でリクード内混亂。

十一

国連特使、安保理はすでに辛抱の限界。  
アベド・ラボ、クリントン新政権にPLOと  
の直接討議を呼びかけ、アラブ側は、新政権  
への期待を示す。

ガザ、人民の鬪い、一〇歳の少女死亡一五人  
負傷。

アラファト、エビ・ナタンとのインタビュー  
が、イスラエルのTVに。

追放問題、追放者の家族が国境へデモ。イス  
ラエル軍は戦車などを増強し、テント村周辺  
を砲撃。欧州議会、追放を非難。

イラク、国連査察団到着、米軍また空爆。

一月二二日  
被占領地、人民の鬪い、一人死亡一九人負傷。  
被追放者たち、レバノン軍検問へのデモ。

一月二三日  
追放問題、一七名が国際赤十字の要請による  
英軍ヘリで帰還（誤認一三人—そのまま獄中  
へ、病気四人—「安全地帯」に送り返し）。

誤認者二人は、全員帰還を要求して拒否。被  
追放者は、七九九の人道問題へのすりかえ、  
ごまかしを許さないと赤十字から医薬品受け  
取りを拒否。

南部、地雷攻撃、イスラエル兵二人死亡一人  
負傷。イスラエルは空爆など。

一月二四日  
被占領地、人民の鬪い、一人死亡三一人負傷。  
南部、レジスタンスの地雷攻撃。

一月二七日  
人民の鬪い、一人死亡一人負傷。

シヤラー、地域協力は、国連決議にそつた和平  
が安定的なものになつたときに意味を持つ。

一月二八日  
被占領地、人民の鬪い、二〇人負傷。

イスラエル最高裁、「破滅への道」決定（本  
文参照）。

一月二九日  
アラファト、ダヤンと会談。

南部、レジスタンスの攻撃、SLA一人死亡  
八人負傷。

一月三〇日  
ガザ人権センター、軍が逮捕後、射殺し、死  
体をジープで引きまわしたと非難（本文参照）。  
南部、レジスタンスの攻撃でイスラエル兵一  
人負傷。イスラエルは空爆や砲撃。

一月二六日  
ガリー、安保理議長に、イスラエルによる度重  
なる違反は安保理の権威への挑戦、必要などの  
ような措置をもとるよう勧告（本文参照）。

米国の世界貿易に占める割合も、五〇年代の四〇%から今は二一%になつてゐる。英は、当初第二の経済大国だったが、今は第七位である。第二次大戦直後は英も仏も多くの植民地を有していた。そしてソビエトの崩壊。すでにその崩壊以前から、国連においては西側の一国としてあり、中国は唯一の部外者とはいえ、大した役割は果たしていないのが実体だ。

アフリカやラテンアメリカは常任理事国を持たず、マーストリヒト条約ではひとつの外交政

たが、なぜ国連の改革が必要なのか？――  
の理由が挙げられる。

一つは、国連が設立されてから、世界は大きく変わったことである。当初は三二カ国だったのが、今や一八〇カ国に到達している。人口においても、五カ国は世界人口の半分を越えていたが、今は四分の一である。経済の面では、まさに劇的に変化している。

米国の世界貿易に占める割合も、五〇年代の四〇%から今は二一%になつていて、英は、当初第二の経済大国だったが、今は第七位である。第二次大戦直後は英も仏も多くの植民地を有していた。そしてソビエトの崩壊。すでにその崩壊以前から、国連においては西側の一国としてあり、中国は唯一の部外者とはいえ、大した役割は果たしていないのが実体だ。

アフリカやラテンアメリカは常任理事国を持たず、マーストリヒト条約ではひとつの外交政

クリントン政権の外交政策のトップだという。すでにクリントン政権は、第二、第三の経済大国を安保理の常任理事国へと提案した。

「性急でたちの悪い考え方」という非難もある。英仏は意見を保留し、イタリアはECこそ常任理事のポストをと主張。

重要日誌

一九九三年一月一一日(一月一〇日)

アラブ連盟外相会議（一二二日まで）、全会一致でイスラエルが七九九を遵守しないなら制裁をという決議を採択したが、交渉の停止には触れず（本文参照）。

アラブ連盟外相会議（一二二日まで）、全会一致でイスラエルが七九九を遵守しないなら制裁をという決議を探討したが、交渉の停止には触れず（本文参照）。

・南部、レジスタンスの  
股外交を非難、イスニ  
エルはどの決議も遵守  
していない、国連は和  
平過程を確実にするを  
めにも平等さを。

- ・ガザ、人民の鬪い、カメラマン拘束される。
- ・追放問題、ハラウイ、この二〇年間で初めてレバノンは明確な立場をとった。責任はすべてイスラエルにある。他方、ベイルート、国連事務所前で六日間の座りこみ開始。ミドルアイースト・ウォッチ、追放は国際法の極悪の違反。
- ・南部、レジスタンスの作戦。
- ・C I A、イラクのミサイル配備を非難。
- ・ブエズ、イスラエルが国連決議の遵守をしな
- 一月一三日

- アビド地区でアラブ人射殺される。エルサレム、追放者の帰還要求のたいまつデモ。
- ・ランティスイ、安保理は強い制裁を。追放はイスラエル兵に安全をもたらしていない。
- ・南部、砲撃戦。
- 一月三一日**
- ・西岸、二人殺される。他方、アラブ系米人三人逮捕、ラビンがハマス＝国際テロと追放の正当化と米への指揮（本文参照）。
- 二月一日**
- ・西岸、二人射殺され一人負傷。ガザでは、先日射たれた少年が死亡。
- ・イスラエル閣議、約100名の帰還など米政権とのパッケージ取引を承認（本文参照）。
- 二月二日**
- ・追放者、全員一致でイスラエル提案の拒否。
- ・アムネスティ、イスラエルの人権侵害、拷問、殺害を非難。追放者の帰還を。
- 二月四日**
- ・追放者、われわれは単に帰還の時を求めているだけでなく、ラビンを打倒し、追放を破壊することを求めている。
- ・クリントン、クリントンファーマーを中東歴訪させること。これは和平創出を優先課題とする指標。他方で、多国間交渉の延期を発表。
- 二月五日**
- ・ガザ、人民の闘い、五人死亡二六人負傷。
- ・ランティスイ、リストの受け取りを拒否する。われわれの統一した立場は七九九だ。イスラエル＝米の取引とイスラエルのテロを非難する。

\*ガザを中心とした人民の闘いの拡大、激化

- ・アベド・ラボ、追放者の郷土への帰還を、それは和平交渉の再開に先立つ。
- 二月六日**
- ・ガザ、人民の闘い、一人死亡二七人負傷。
- ・ランティスイ、クリントンファーマーは決議七九九を無視しながらアラブに信用せよと言えるのか。
- 二月七日**
- ・被占領地、人民の闘い、一人死亡一九人負傷、また報道陣二人が拘束される。
- ・イスラエルの人権運動ベツエレム、ラビン就任後死者が急増と非難のレポート。
- 二月八日**
- ・西岸、人民の闘い、三人死亡。
- ・ランティスイ、五人の強制移送の後、これ以上病氣の者の「安全地帯」への移送は拒否。
- 二月九日**
- ・南部、レジスタンスの攻撃。
- ・アラファト、米＝イスラエル取引を非難。
- ・ガザ、イスラエルの商人を射殺、もうひとりを負傷させる。
- 二月一〇日**
- ・ムバラク、また突然ダマス訪問（本文参照）。
- ・南部、レジスタンスの攻撃。

に恐れをなした敵は、二月一日、戦車をも動員して、活動家の家屋破壊を展開。ラビン政権になって、対戦車砲＝バズーカ砲を用いての家屋破壊や家屋への攻撃が展開されるようになつたが、戦車砲を用いての破壊活動は初めて。壊された家屋は二〇以上で、三五家族がホームレスにさせられた。

イスラエル側は、インティファーダつぶしのために、「通報者」のリクルートにやつきになつてゐるが、「通報者」なんてトイレット・ペーパーのようなもので、決して「一度とは使えない」と被放者は言う。人民のネットワークの方が圧倒的に強いからだ。

\*もう一つの「宣戰布告なき戦線」、レバノン南部の闘いも激化している。味方の闘いに対して、敵はクリントンファーマーの歴訪を控えて、「テロリスト」とその支援国を印象付けるため、ヨリテロリスト＝ラビンの本性を發揮。人民の怒りは大きくなるだけだ。

\*クリントン政権は、日独の安保理常任理事国入りをうちあげた。ガーリ提言をなぜ日本が討議しようとしたのかは明白。同時に、そうした米のペトトを常任理事国にすることへの非難の声が上がる。「一度たりと国連決議や国際法を尊重したこともないイスラエルをもつと手厚く保護しようとしているだけだ、と。

### ●編集後記